

古い御知己であり、又私の壽像製作の話聞かれて、大に同情と賛成をせられまして、試験所で試験的に等身の陶像を焼いて見やうと云ふ事になり、約三ヶ年を経てやうやく出来た様子の次第であります。私と致しましては、釉薬の色や其他にまだく研究しなければならぬ所があり、又彫刻といたしましては、尙意に満たぬものがあつて、先生の御尊容を表し得なかつたのであります。どうか御受納を得ますならば誠に幸に存する次第であります。

⑩ 依囑製作六曲屏風

昭和十年四月、依囑製作の東京十二景六曲屏風が完成し、四月十日歌舞伎座に於ける東京市主催満洲国皇帝奉迎式に於いて皇帝に献上された。各紙がこれを大きく採り上げているが、四月十日の『時事新報』は次のように報じている。

市献上の屏風完成・あす皇帝陛下へ

歌舞伎御見物の折御座所の後に配す

美校諸教授が精根盡した東京十二景 見事な出来栄

御來訪の御思出のよすがにもと東京市が満洲国皇帝陛下に献上する東京十二景地板嵌六曲屏風一雙は、美術學校の諸教授が精根をつくしてその製作を急いでゐたが本九日見事に出来上り、明日皇帝陛下が歌舞伎御見物の折御座所の後に配して一層御感興を添へることになつた、この屏風は桐、桑、蒔繪、鑄金、鍛金、彫金等あらゆる美術工藝の粹を集めて合作されたもので、高さ六尺

幅二尺、木目もはつきりした桐の素地に長さ一尺二寸五分、幅一尺一寸五分の東京名所十二景を誠に清楚に織り込み、この桐地下方の蒔繪にはかすかに東京市のマークを浮かしてあると云ふ擬り方で、裏はこの表の清楚さに比し布目に朱塗寶相華の高蒔繪を配してあると云ふ大陸味たつぶりのものである、この構圖は森田〔武〕助教授が一切當り、木工は帝展でも特選を得てゐる淺草橋の稻木春千里氏が製作したものであるが十二景は

日本橋（深瀬嘉臣助教授）赤坂離宮（海野清教授）上野動物園（津田信夫教授）二重橋（松田權六助教授）楠公銅像（丸山不忘講師）湯島聖堂（六角紫水教授）明治神宮（磯矢阿伎良講師）議事堂（内藤春治助教授）東京驛（山崎覺太郎助教授）靖國神社（清水龜藏教授）神宮繪畫館（石田英一教授）永代橋（高村豊周教授）

がそれ／＼擔當して制作に當つたものである。

⑪ 杉田禾堂と大阪府産業工芸博覧会

昭和十年六月八日から二十八日まで、大阪府立貿易館で大阪府産業工芸博覧会が開催された。「工芸品の工業化、工業品の工芸化」をスローガンとするこの初めての博覧会には、大阪府商工技師にして昭和七年六月同府立工業奨励館工芸産業奨励部の初代部長となつた杉田禾堂（精二）が大きな役割を果たした。禾堂は明治四十五年に鑄造科を卒業し、大正八年に講師に就任（鑄造実習担当）。金工研究会および无型の中心人物で、日本工芸美術会の創立や、帝展第四部創設にも重要な役割を果たした。昭和二年、初の帝展第四部の

特選となり、以後毎年入選、昭和五年より推薦、昭和八年審査員となった。无型の理論派として論陣を張ったが、大阪に赴任した翌年に无型は解消、その後の実在工芸美術会の同人には加わらなかつた。本校講師としての授業については、女婿芳武茂介（昭和十年工芸科鍛金部卒）の文を後に引用する。

大阪府産業工芸博覧会が開催された同じ年の十月に高村豊周らの実在工芸美術会が創立され、「用即美」を唱える。それはかつての无型同人として禾堂と歩みを共にするものと言えよう。禾堂の大阪での業績について、出原栄一は『デザイン』第三十七号所載『「工業品美化」運動』に次のように記している。

着任早々より「工業品美化」運動に全力を注がれた。今日工業品美化という言葉は何かピンと来ないものがあるが、要約すれば現代いうところのグッドデザイン運動であり、又インダストリアル・デザインの振興策であった。一方新進工芸美術家の育成にも熱意を示され数回の研究会をもち真の工芸美術を説かれた。これは若い者による新しい工芸の研究に基いてこれを産業工芸の範とし生活用品の改善に資すべき努力であった。クラフト・デザインといわれるものは表現こそ異なるが氏が当時となえた、「実用工芸品」改善策と軌を一にしている。（中略）実に数多くの新規性ある研究を次々と実行された。然し時期尚早の感もあり、全てが受け入れられたとは言えない。これが工芸の研究かと非難もあった、独善ともいわれた。然し今日尚引きつがれている奨励館工芸部を始め、大阪の美術工芸界、産業工芸界の今日の隆盛の裏には、氏

の蒔いた種が今花を咲かせているのだといっても過言ではなからう。

異色工芸家杉田精二

芳武茂介

〔上略〕

氏は明治四十五年に東京美術学校の鑄造科を卒業し、その後母校の講師をつとめながら、昭和三年に設立された商工省工芸指導所の金工部長を兼ね、あとで大阪府商工技師として府立工業奨励館の工芸部長になられた。

もともと日展に工芸部が設けられた最初からの美術工芸家で、審査員を幾度もやり、古めかしい日展参事の肩書の持主でありながら、早くから産業工芸をかじり、先輩同僚の間に問題をもち出し、尊敬されながらも遂にこの世界になじみ得なかつた異色の工芸家であった。

異色作家として、大きな反響をよんだ作品は昭和五年第十一回帝展に出品した「用途を予期せぬ美の創案」と題する一組三個の鑄物で、それぞれ原始期、過渡期、完成期と名づけた銀の円筒構成、青銅の矩形透し構成、鋼鉄の波文構成の小品群である。

後日彼は次のような説明をつけ加えた。

——この作品は意匠の変化と材料の扱いによる美の創案であつて、工芸の基本技術の研究である。実用的要素を持たぬ故、工芸の邪道だというのは、余りにも工芸の名に捉われている。

当時「用途を予期せぬ……」と書いて誤解を招いた。それは用

語の誤りであった。今は「指示せぬ……」と改める、故に置物にしても亦他の用途に応用してもよい——と。

当時日展工芸は漸く「機能の逸脱」が目立って世の批判をうけたから、用語の誤りは日展工芸を代表して矢表に立った観を呈したが、作品の新鮮さは据え置きを食った。

当時は「オブジェ」という便利な言葉はなかった。彼は地下で苦笑していることだろう。

彼には己れの所属する日展工芸が進みつつある警戒すべき方向を見越して世評を打診するアドバルーンのもりだったのかも知れない。日展の美術工芸は、細工物を創作に転ずる運動であったが、美術に追従するあまり民衆の生活から離れて特殊な範囲に縮小されてしまった。

このような環境で、数学が得意だったり、機械いじりが好きだったり、理³ずめな物の考え方をする彼が異色だったのは、今日の常識からはむしろおかしい事にはない。学生の私達は、時々大阪から上京される杉田講師の講義を大いに期待して、生徒ばかりでなく先生方も大勢教室のうしろに立って傾聴したものだ。

内容は彼が直接大阪の業界を対象として、試みた色々⁽⁶⁾をアイディアとその具体的な試作資料であった。

「挺漆」の研究は日本の漆技術の新しい使い方である。

漆は出来上がった素地に塗られて完成するがこれに漆を塗った素地を用途に応じて用いる逆な仕事である。例えば漆塗りの長い丸棒をまずつくり、適宜切断して、ドアハンドル、プロッターの把

手に用いる、試作品はあらかじめ計画された部品の結合によって出来上っていた。

その後三十年を経た今日、漆工芸家にこのようなアイディアは遂に生れていない。ただ先覚がやった仕事の範囲内で図柄を変え、くりかえしているに過ぎない。

「把手の研究」や「注器の滴流防止の研究」は、コーヒーや紅茶茶碗の把手の観念的な形体に対して、機能的な追究を進めたもの、またドビンやヤカンのいわゆる尻もりを防ごうと、実験装置によって熱心に取り組んだ資料である。

また「自然の現象から抽出する意匠」は、今日いう構成の基本で、統一と変化、対称、繰り返し、リズムなどを自ら撮影して豊富な写真から抽出し、系統別に図表にまとめあげたものであった。

こうした資料は当時の美術工芸界には無縁であったし地方の公共機関のとほしい予算で、その上理論の展開よりも具体的な実用を尊ぶ環境のもとで、次々と試みられたアイディアとデザインは、当時ごく限られた一部の人達しか知らなかったのである。

偶々昭和十年に開かれた大阪府産業工芸博覧会は「工業品の美化」という前代未聞の珍しいテーマを提げて世を驚かせた。彼はこの標語を創案した陰の人で、その業績から見ても当然のこととかなずける。

恐らく今日の工業デザインに繋がる日本での最初のテーマだと思う。

時代と環境は、彼の活動をただ散発させるだけで過ぎ去った

が、彼は明らかにアイデアマンとオブジェ作家の先駆者の一人に数えられてよいだろう。

『デザイン』第三十七号。昭和三十七年十月。数字は漢数字に統一した。)

⑫ 実在工芸美術会の創立と生徒グループの展覧会

昭和十年十月、実在工芸美術会が旧无型同人を中心に結成された。設立に際しての声明では、「用即美として一の絶対である時のみそこに工芸的眞がある」とうたい、帝展にみられた鑑賞的工芸、装飾の過剰を批判し、平凡な姿であるが工芸的に健康なるものを目指した。創立時の同人は鍍金の高村豊周、西村敏彦、豊田勝秋、内藤春治、丸山不忘、陶磁の河村喜太郎、新井謹也、漆工の吉田源十郎、山崎覚太郎、染織の広川松五郎、木村和一の十一名であった。翌十一年一月、機関紙『実在工芸』第一号を発行、同年五月、東京府美術館で第一回公募展を開催し、以後毎年、第四回まで開催した。同十五年、紀元二千六百年奉祝美術展が開催されたため、実在工芸展は中止となり、その後戦時体制に入り、物質の欠乏などで運営が行きづまり、その実体を失う。

実在工芸美術会の創立に呼応するように、昭和十二年には、本校卒業の新進作家あるいは在校生たちによって、工芸青年派、^{かたち}型会、^{けい}経緯工芸美術会等が組織された。

在校生蓮田脩吾郎（鍍金）、義江（板坂）辰治（彫金）、高橋由昌（彫金）、野崎南海雄（鍛金）は昭和十一年十二月に新人社を組織し銀座紀伊国屋で展覧会を開催し、翌年に工芸青年派を結成して、

同十二年、銀座紀伊国屋で展覧会を開き、翌十三年卒業の後、春秋に第三回まで展覧会を紀伊国屋で開いた。高村豊周が案内状に推薦文を贈っている。

型会は昭和十三年四月、卒業と同時に高橋節郎（漆工）、金子徳次郎（彫金）、黒瀬英雄（鍍金）、小杉二郎（図案）の四名で結成、銀座資生堂ギャラリーで第一回展を開催し、引き続き十二年、十三年と展覧会を開いた。高村豊周と広川松五郎が案内状に推薦文を贈っている。

経緯工芸美術会は、昭和十三年、在学中の染川鐵之助（鍍金）、田澤清美（鍛金）、田中芳郎（彫金）、吉田丈夫（漆工）、辻光典（漆工）によって結成され、四月、第一回展を銀座紀伊国屋で開いた。高村豊周と山崎覚太郎が推薦文を贈っている。その後同会は毎年、春秋に資生堂で展覧会を開き、同十五年、第五回展を最後に出征のため解散のやむなきにいたった。

新進作家の徴兵のため、以上三団体の活動は中断した。嶋本久寿弥太は『鍍金近代史稿』（鍍金家協会、昭和三十二年）で、これらに参加した作家たちは、のちにインダストリアル・デザイン、クラフト・デザイン等と呼ばれる新しい動向をみせ、また、工芸の素材を使った造形運動のはしりをみせた、と評した。

田中芳郎氏（昭和十四年工芸科彫金部卒業）は編者の質問に対して次のように話した。

パウハウスの教育は全世界に影響を与えたが、そういう流れの中に大きく言えば无型の人たちも工人社もいた。不思議なのは、ドイツが第一次世界大戦で負けた翌年にパウハウスが開校し、アメリカ